九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

モンゴル語のアスペクトに関する研究 : 満洲語・朝鮮語との対照研究

松岡, 雄太
九州大学大学院人文科学研究院

https://doi.org/10.15017/2186187

出版情報：韓国研究センター年報. 9, pp.65-68, 2009-03-31. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

モンゴル語のアスペクトに関する研究

―満洲語・朝鮮語との対照研究―

松岡雄太（九州大学大学院人文科学研究院）

目　　次

第１章　問題提起と用語の定義
1.1.　問題提起
1.2.　「アスペクト」の定義
1.3.　本研究の目的
1.4.　研究対象とするデータ
1.5.　本論文の構成

第２章　現代語のアスペクト体系
2.1.　現代語の方言
2.2.　一回的動作
2.2.1.　一般相と継続相の対立
2.2.2.　“-j bai-”と“-aad bai-”の対立
2.2.3.　“-j bai-”と“-saar bai-”の対立
2.2.4.　一回的動作に関わるアクツィオンスアールト
2.3.　複数回的動作
2.3.1.　現代語に反復相はない
2.3.2.　現代語に習慣相はない
2.4.　パーフェクト
2.4.1.　「パーフェクト」の定義
2.4.2.　“-sn bai-”と“-aad bai-”の対立
2.4.3.　“-sn bai-”と“-x bai-”の対立
2.4.4.　文末で単独で用いられる“-sn”
2.5.　現代語のアスペクトに関するまとめ
2.5.1.　現代語のアスペクト体系
2.5.2.　パラダイム関係とシンタグム関係
2.5.3.　動詞分類
2.6.　現代朝鮮語のアスペクト体系との対照
2.6.1.　「動的継続相」と「静的継続相」
2.6.2.　「目の前性」

第３章　アスペクト体系の通時的変遷
3.1.　モンゴル語の時代区分
3.2.　研究対象とする文献
3.2.1.　『元朝秘史』
3.2.2.　「蒙文檔案」
3.2.3.　『蒙語老乞大』
3.2.4.　『初学指南』
3.3.　中世語のアスペクト
3.3.1.　従来の研究の記述
3.3.2.　中世語のアスペクト形式
3.3.3.　一回的動作
3.3.4.　複数回的動作
3.3.5.　パーフェクト
3.3.6.　中世語のアスペクトに関するまとめ
3.4.　近代語のアスペクト
3.4.1.　動詞“bai-”の意味変化
3.4.2.　近代語の“-ju bai-”
3.4.3.　“-saar bai-”の出現
3.4.4.　“-dag”の使用頻度の増加
3.4.5.　近代語のアスペクトに関するまとめ
3.5.　満洲語のアスペクト体系との対照
3.5.1.　満洲語のアスペクト体系
3.5.2.　“-me bi-”と“-fi bi-”の対立
3.5.3.　“-hai bi-”の意味
3.5.4.　ホルチン方言と満洲語のアスペクト体系の類似性

第４章　まとめと今後の課題
4.1.　本論文の主張
4.2.　今後の課題
4.3.　文法化と方言差

本論文は、モンゴル語のアスペクトについて、現代語という共時態、及び、中世語から現代語に至る通時態の二つの側面を、朝鮮語・満洲語との対照研究の観点から、体系的に記述したものである。本論文は、第１章「問題提起と用語の定義」、第２章「現代語のアスペクト体系」、第３章「アスペクトの通時的変遷」、第４章「まとめと今後の課題」の四章から構成される。

第１章では、モンゴル語のアスペクトに関する従来の記述が、研究者によって大きく異なること、そしてその

原因が、アスペクトをどのように定義するかの違いにあることを論じた。アスペクトの定義は、主に、(a) Comrie（1976）に代表される、アスペクトを「機能＝意味論的範疇」として定義する立場と、(b) Маслов (1978, 1984) に代表される、アスペクトを「文法範疇」として定義する立場、に二分される。従来の研究における記述の不一致は、前者（a）の立場で、アスペクトを意味的に定義した結果生じたものだと考えられる。意味的な定義には、原理的に無限のバリエーションがありうるためである。本論文では、後者（b）Маслов (1978, 1984) の定義に依拠して議論を進める。

第２章では、まず、中国内蒙古自治区東部で話されるホルチン方言を対象にして、現代語のアスペクト体系を明らかにした。従来の研究においてアスペクト形式として扱われていた形式は、(a)「ゼロ形式（音形をもたない無標の形式)」、(b)「接辞」(***-sx-, -čix-, -čgaa-, -lj-*** など)、(c)「副動詞 ＋ ***bai-***」(***-j bai-, -aad (1) bai-, -saar bai-***)、(d)「形動詞 ＋ ***bai-***」(***-sn bai-, -dag bai-***)、(e)「副動詞 ＋ 副動詞」(***-saar*** ＋ ***-saar, -aad*** ＋ ***-aad*** など）の五種類にまとめられる。これらの形式の中で、アスペクト範疇を形成するのは、(a)「ゼロ形式」と（c)「副動詞 ＋ ***bai-***」の二種類のみであり、これらの形式は次の(1)のような体系をなしている。

(1) 現代語のアスペクト体系

(a) 動作の継続について、無標の「一般相」（ゼロ形式）と有標の「継続相」(「副動詞 ＋ ***bai-***」）が対立をなす。

(b) 有標の「継続相」は、第一に、動作の継続を動きのあるものとして捉えるか、動きのないものとして捉えるかにおいて、「動的継続相」(***-j bai-***）と「静的継続相」(***-aad bai-***）の対立をなす。

(c) 有標の「継続相」は、第二に、動作が継続する時間的な長さにおいて、「継続相」(***-j bai-***）と「長期継続相」(***-saar bai-***）の対立をなす。

第２章では、次に、アスペクトの意味に関わる動詞の分類を行なった。「継続相」の三つの形式（***-j bai-, -aad bai-, -saar bai-***）は、結合する動詞が、限界動詞か非限界動詞かによって意味が変わる。本論文では、動詞の限界性が ***-j bai-, -aad bai-*** の意味から判別できることを主張した。

第２章では、最後に、ホルチン方言と現代朝鮮語のアスペクト体系における類似点を示し、ホルチン方言に「動的継続相」と「静的継続相」の対立を認める妥当性が、類型論的に支持されることを論じた。現代朝鮮語のアスペクトは、(2)のような体系をなしている。

(2) 現代朝鮮語のアスペクト体系

(a) 動作の継続について、無標の「一般相」（ゼロ形式）と有標の「継続相」(「連用形語尾 ＋ ***iss-***」）が対立をなす。

(b) 有標の「継続相」は、動作の継続を動きのあるものとして捉えるか、動きのないものとして捉えるかにおいて、「動的継続相」(***-ko iss-***）と「静的継続相」(***-a/e iss-***）の対立をなす。

このように現代朝鮮語の継続相 ***-ko iss-*** と ***-a/e iss-*** の対立は、モンゴル語の継続相 ***-j bai-*** と ***-aad bai-*** の対立と大変類似する。ただし、モンゴル語と朝鮮語の継続相は、以下の二点において違いがある。第一に、結合する動詞についての制限が異なっている。すなわち、モンゴル語の ***-j bai-*** と ***-aad bai-*** は、結合する動詞に制限がないのに対して、朝鮮語の ***-ko iss-*** と ***-a/e iss-*** は、結合する動詞に、自他動、主体の変化性による制限がある。第二に、「結果性」を表わす、ホルチン方言の ***-aad bai-*** と現代朝鮮語 ***-a/e iss-*** には、「目の前性」において違いがある。

すなわち、朝鮮語の ***-a/e iss-*** は、目の前に見える「結果性」しか表わせないのに対して、ホルチン方言の ***-aad bai-*** は、目の前に見えない「結果性」も表わせる。この違いは、朝鮮語の ***-a/e iss-*** が、まだ、存在動詞 ***iss-*** の語彙的意味を残しているのに対して、モンゴル語の ***-aad bai-*** が、存在動詞 ***bai-*** の語彙的意味から解放されていることを示唆する。つまり、モンゴル語の ***-aad bai-*** は、朝鮮語の ***-a/e iss-*** よりも文法化（語彙項目が歴史的に文法的な機能を果たすようになる過程）の進んだ段階にあると考えられる。

第３章では、まず、『元朝秘史』を研究対象として、中世語（13世紀～15世紀前半）のアスペクトについて論じた。中世語には、現代語の「副動詞 ＋ ***bai-***」（***-j bai-, -aad bai-, -saar bai-***）に相当する形式に、***-n bü-*** と ***-ju bü-*** の二種類があり、これら二種類の形式は、⑶のような体系をなしている。

⑶ 中世語のアスペクト体系

(a) 動作の継続について、無標の「一般相」（ゼロ形式）と有標の「継続相」（「副動詞 ＋ ***bü-***」）が対立をなす。

(b) 有標の「継続相」は、さらに、「動的継続相」（***-n bü-***）と「静的継続相」（***-ju bü-***）の対立をなす。

以上のことから、モンゴル語のアスペクト体系には、中世語から現代語に至る過程で、①「存在動詞の変化」（***bü-*** から ***bai-*** に）、②「動的継続相と静的継続相における、形式のシフト」（***-n bü-*** から ***-j bai-*** に、***-ju bü-*** から ***-aad bai-*** に）、③「長期継続相 ***-saar bai-*** の発生」という大きく三つの変化が起こったと考えられる。

第３章では、次に、この通時的変遷を明らかにするために、「蒙文檔案」、『蒙語老乞大』、『初学指南』といった口語文献を対象とし、近代語（17世紀～19世紀）のアスペクトについて論じた。これら三種類の近代語文献からは、上述の、①「存在動詞の変化」と②「***-n bü-*** から ***-j bai-*** への移行」が、遅くとも17世紀初葉に起こったことと、同、③「長期継続相 ***-saar bai-*** の発生」が、遅くとも18世紀に遡ることが確認される。なお、***-aad bai-*** の用例は、上の三種類の近代語文献には確認されない。

第３章では、最後に、モンゴル語のアスペクト体系に、上述の変化が起こった原因に関して、17世紀から18世紀にかけて、モンゴル語と満洲語の間に言語接触があり、モンゴル語が満洲語から影響を受けたのではないかという仮説を提示した。満洲語のアスペクトは、⑷のような体系をなしている。

⑷ 満洲語のアスペクト体系

(a) 動作の継続について、無標の「一般相」（ゼロ形式）と有標の「継続相」（「副動詞 ＋ ***bi-***」）が対立をなす。

(b) 有標の「継続相」は、第一に、動作の継続を動きのあるものとして捉えるか、動きのないものとして捉えるかにおいて、「動的継続相」（***-me bi-***）と「静的継続相」（***-fi bi-***）の対立をなす。

(c) 有標の「継続相」は、第二に、動作が継続する時間的な長さにおいて、「継続相」（***-me bi-***）と「長期継続相」（***-hai bi-***）の対立をなす。

満洲語のアスペクト体系は、ホルチン方言のものと大変類似している。つまり、モンゴル語が中世語から現代語に至る過程で経た、上述の三つの変化が起こった原因は、近代語の時期に、満洲語のアスペクト体系から影響を受けたためと考えれば、全て説明することができる。

第４章では、まず、第２章と第３章で明らかにしたことを整理して結論に代えた。また、今後の研究課題の一つとして、現代語の方言差について言及した。モンゴル国で話されるハルハ方言のアスペクトは、ホルチン方言と若干異なる。すなわち、ホルチン方言の ***-aad bai-*** は、主に「結果性」と「反復性」の意味を表わすのに対して、

ハルハ方言の ***-aad bai-*** は主に「反復性」を表わし、ホルチン方言が「結果性」を表わす条件下で結果性を表わせない場合がある。この違いは、ハルハ方言がホルチン方言よりさらに文法化の進んだ段階にあることを示唆する。今後、現代語の諸方言を調査することによって、アスペクト体系の通時的変遷を明らかにすることもできると考えられる。

以上、本論文は、従来の研究が各形式の意味記述にとどまっていた段階から、それらを体系的に捉える段階に、研究を進めた。